

# グローバル化時代のアジア主義—中村哲の場合—

初瀬 龍平

## 要旨

本論は、パキスタン北西辺境州とアフガニスタン北東山岳地帯における医師中村哲と、彼を支えるペシャワール会の活動と思想を検証するものである。彼らは、1984年から今日まで、当地においてアフガニスタン難民、アフガニスタン農民、およびパキスタン貧民に向けて、医療活動と農村復興支援活動を展開してきた。本論では、第一に、中村哲とペシャワール会の20年間（1894年～現在）にわたる現地活動を、3期にわけて概観する。第二に、中村が、どのような言説をもって、自分たちの行動を説明し、またそれを意味づけるかを明らかにする。そこでは、中村の心情と信念、および世界認識を取り出し、彼が自己の歴史的存在を確認する認識の枠組みとして、アジア主義的な世界認識を用いていることを提示する。第三に、中村の思想をグローバル化時代におけるトランズナショナルなアジア主義として位置づける。このアジア主義は、国際的に米国中心のグローバル化に反発しながら、行動レベルで現地のトランズナショナルな活動を実践している。それは、古典的な意味でのアジア主義ではないが、「アジアで共に生きる」という信条に支えられている点では、アジア主義的である。最後に、全体の議論をまとめ、あわせて中村における平和憲法の積極的意味づけを明確にしておく。

キーワード：中村哲、ペシャワール会、アジア主義

## I. はじめに

本論は、パキスタン北西辺境州とアフガニスタン北東山岳地帯における医師中村哲と、彼を支えるペシャワール会の活動と思想を検証しようとするものである。彼らは、1984年から今日まで、当地においてアフガニスタン難民、アフガニスタン農民、およびパキスタン貧民に向けて、医療活動と農村復興支援活動を展開してきた。

彼らの活動は、国内外で高く評価されている。これまでに、中村哲（個人）あるいは中村哲・ペシャワール会（連名）は、外務大臣賞（1988年）、毎日国際交流賞（1992年）、西日本文化賞（1993年）、読売医療功労賞（1996年）、朝日社会福祉賞（1998年）、アジア太平洋賞特別賞（2000年）、若月賞（2002年）、沖縄平和賞（2002年）、マグサイサイ平和・国際理解賞（2003 Ramon Magsaysay Award for Peace and International Understanding）、大同生命地域研究特別賞（2003年）、イーハトーブ賞（2004年、宮沢賢治学会）などを受賞している。受賞の理由は、「アフガニスタン・パキスタン国境地帯の難民と山岳地帯の貧民を戦争、病気、災害の苦しみから

救おうとする中村医師の情熱的取組み」(マグサイサイ賞<sup>1)</sup>)、「常に弱者の立場に立ち続ける—医師としての献身的努力」(若月賞<sup>2)</sup>)、「内発的多様性を基礎とした平和実現の促進に貢献したこと」(沖縄平和賞<sup>3)</sup>)などである。

彼らの活動の包括的評価としては、大同生命地域研究特別賞贈賞での松原正毅(国立民族学博物館教授)の次の紹介が、簡潔かつ適切である。(1)「中村哲氏は、1984年以来、パキスタンのペシャワールを根拠地としながらハンセン病根絶治療とアフガン難民の診療活動を持続的にこなってきた。この間、アフガニスタンやパキスタンの現地にいくつかの診療所をもうけると同時に、アフガニスタン東北部山岳地域の無医村における診療にもたずさわっている。」(2)「これらの医療活動が、ソ連のアフガン戦争、内戦、タリバーン政権、アメリカのアフガン戦争という一連の困難な局面をとおして、一貫した姿勢で継続したことは驚異的といってもよいだろう。これは、現地に身をおき、現地の人びとの視点でものをみ、考えたうえで行動することから、はじめて可能になるものといえる。現地に根づいた活動として、高い評価があたえられるものである。」(3)「最近では、戦乱のなかで徹底的に破壊されたアフガニスタンの人びとの日常生活のシステムを構築してゆくために、井戸を掘り、用水路を拓く活動にも力を注いでいる。現地の日常生活が、自律的に機能してゆく道をさぐるためである。水源を確保し、農業を再興してゆくことによって、生存のための最低限の保障を確立する必要があるからだ。これは、もっとも地道な努力であると同時に、地に足のついた事業といえる。」(4)「中村哲氏が20年ちかく展開してきた医療活動を基盤にした一連の活動は、アフガン難民やアフガンの人びととともに生きるころみであったといえる。このころみは、超大国の力のおごりにふりまわされる21世紀の時代に異なる文明や異なる文化に属する人びとが共存してゆく道をひらくうえで大きな指針をあたえるものである<sup>4)</sup>。」(下線引用者)

このように、中村・ペシャワール会の活動と思想は、すでに一定の社会的評価を得ている。この点では、本論はとくに新しい視点を提起できるものでない。本論がここで注目したいのは、むしろ、これまでにあまり明確にされていない点である。すなわち、中村とペシャワール会員の一部に、アジア主義的な志向や思考が見られることの意味である。本論では、とくにこの点を取り上げてみたい。なお、管見の限りでは、中村・ペシャワール会についての研究は、まだ断片的・萌芽的段階にあると思われる。

- 
- 1) Ramon Magsaysay Award Foundation から。Magsaysay Awardees 2003, <http://www.rmaf.org.ph/> (access on 1 March 2004)
  - 2) [http://www.valley.ne.jp/~sakuchp/gyouji/daigaku/summer02/Mr\\_nakamura.htm](http://www.valley.ne.jp/~sakuchp/gyouji/daigaku/summer02/Mr_nakamura.htm) (アクセス2005年9月22日)。農村医療の先駆者・佐久総合病院名誉総長・若月俊一医師を記念しての賞。若月については、南木佳土『信州に上医あり—若月俊一と佐久病院』岩波新書、1994年、若月俊一『村で病氣とたたかう』岩波新書、2002年を参照。
  - 3) 沖縄平和賞委員会(主体は沖縄県)から。<http://www3.pref.okinawa.jp/site/view/contview.jsp?cateid=11&id=9324&page=1> (アクセス2005年9月22日)。賞金の1千万円は、アフガニスタン内のダラエピーチ診療所の改修費に充てられた。2003年8月に改修が終わって、この診療所は「沖縄平和診療所」(Okinawa Peace Clinic)と呼ばれることになった。しかし、2005年1月には、カーブル政権の方針で、この診療所を放棄することになった。
  - 4) [http://www.daido-life-fd.or.jp/03\\_nakamura.html#comment](http://www.daido-life-fd.or.jp/03_nakamura.html#comment) (アクセス2005年9月22日)

以下、Ⅱで中村とペシャワール会の現地活動を概観する。ついでⅢで、中村の心情・信念と世界認識の面から、その対外思想を検証する。さらに、Ⅳで、中村の対外思想をグローバル化時代のアジア主義の一類型として位置づける。最後に、本論の議論をまとめて本論を終わる。

## Ⅱ. 中村哲とペシャワール会の現地活動

中村哲・ペシャワール会の活動について、本論のような小論で、その全体像を描くことはできない。そこで本論では、アジア主義的思想を検証するための前提として必要な事実関係に限定して、彼らの活動を確認しておく<sup>5)</sup>。しかし、この要約は、多くのことの細部を削り落とすという意味で、かなり無謀な試みでもある。この表層的・表面的な叙述では、彼らの活動はすべてスムーズに行ったかの感を与えるかもしれない。しかし、改めて言うまでもなく、とくに現地での人間関係、および中村とペシャワール会事務局の関係は、きわめて錯綜し、波乱万丈であった。現地での対立関係については、中村の言葉によると、「わけても私たちを悩まし続けたのは人々の割拠性であった」(アフガニスタン人とパキスタン人、イスラム教徒とキリスト教徒、異なる民族・血縁集団間、及びこれらが幾重にも重なった複雑な対立<sup>6)</sup>)。現地の会計担当者は、「不正」を防ぐために、日本人に限定されている<sup>7)</sup>。中村と事務局の関係については、福元満治(広報担当理事)によれば、「中村先生は振り子のように揺れるので、振り子の先っちょについてたらだめだ…、根元にくっついとかなないと振り回される<sup>8)</sup>。」この言葉は、中村に好意的であるが、事務局と中村との鋭い緊張関係を示唆している。

中村哲は、1946年に福岡市に生まれ、1973年に九州大学医学部を卒業して、医師となった。1982年に、彼は、精神科の医師として働いていたとき、岩村昇医師の講演を聴く機会をもった。岩村は、1962年から1980年にかけて、日本キリスト教海外医療協力会(Japan Overseas Christian Medical Cooperative Service)の派遣で、ネパール山岳地帯で医療活動を続けてきた海外医療協力の先達である<sup>9)</sup>。講演後、中村は、岩村に私信を書き、自分の意思を伝えていた<sup>10)</sup>。この

5) 中村哲とペシャワール会の活動については、以下を参照。中村哲『ペシャワールにて』増補版、石風社、1992年。同『アフガニスタンの診療所から』筑摩書房、1993年。同『ダラエヌールへの道』石風社、1993年。同『医は国境を越えて』石風社、1999年。同『医者井戸を掘る』石風社、2001年。同『ほんとうのアフガニスタン』光文社、2002年。同『辺境で診る、辺境から見る』石風社、2003年。同『医者よ、信念はいらぬ、まず命を救え!』羊土社、2003年。『中村哲さん講演録』ピースウォーク京都、2002年。中村哲・ペシャワール会編『空爆と「復興」』石風社、2004年。ペシャワール会事務局編『ペシャワール会報—合本 No. 1 (1983年12月)~No. 79 (2004年4月)』石風社、2004年。『ペシャワール会報』No. 80 (2004年7月)~No. 83 (2005年4月)。ペシャワール会『アフガンを緑の大地に~ペシャワール会20周年記念~』ビデオテープ。

6) 中村、前掲『辺境で診る、辺境から見る』50頁。

7) 中村、前掲『医者よ、信念はいらぬ、まず命を救え!』66頁。

8) 福元満治『伏流の思考—私のアフガン・ノート』石風社、2004年、26頁。

9) 岩村昇の思想と行動については、岩村昇・史子『山の上にある病院』新教出版社、1965年、同『ネパール通信』新教出版社、1968年、同『わがふるさとネパール』新教出版社、1970年、岩村昇『ネパールの碧い空』講談社、1975年、同『共に生きるために』新教出版社、1982年、同『ネパールの「赤ひげ」タイへ行く』岩波ブックレット、1978年参照。

10) 丸山昇『ドクター・サーブ』石風社、2001年、84-87頁。

申し出を受け入れる形で、日本キリスト教海外医療協力は、1983年4月に、中村医師をパキスタン北西部の国境地帯のペシャワール・ミッション病院に派遣することを決めた。その任務は、病院のハンセン病棟の責任者であり、中村は1984年5月からこの勤務に就いた。当地は、ハンセン氏病の多発地帯であった。

この就任以前の1983年9月に、彼の友人が集まって、その活動を支援するために、福岡市にペシャワール会というNGOを立ち上げた。同会は、「哲ちゃんがやるから応援しようや」という形で発足した。そのメンバーは、大学時代の友人・知人や、香住カ丘バプティスト教会<sup>11)</sup>、国立肥前療養所（中村の元職場）、徳州会病院（支援者などの職場、中村が一時非常勤医師として勤務）、福岡登高会（中村は1978年のヒンドウクシュ山脈最高峰ティリチ・ミール登山隊付きの医者）、福岡YMCA関係者の人たちであった。事務局を担った若い世代のメンバーは、「いろんな職業のアジア好き」であり、「哲ちゃん」は彼らの「思いを代弁してくれる具現者」であった<sup>12)</sup>。その後、中村が活動範囲を拡大していくにつれて、当初のメンバーで中村の事業拡大に賛成でない人々が出てきて、4～5年目にメンバーが入れ替わり、会の性格も変わって、「中村哲がやりたいことを、どういうふうにサポートするかという形」に変わった<sup>13)</sup>。

中村が赴任したパキスタンのペシャワール市は、北西辺境州の州都である。この地域に住む人々の多くは、パシュトーン人であり、パシュトーン人はアフガニスタンの東部にも多く住んでいる。同じパシュトーン人が、国境を越えて、両国に住んでいる。アフガニスタンでは、総人口1800～2200万人で、内訳はパシュトーン人約40%、タジク人25%、ハザラ人10%、その他ウズベク人などとなる<sup>14)</sup>。パシュトーン人を律しているのは、復讐、もてなし、ジハード、名誉、旅行者保護、長老会議ジルガなど、辺境社会の慣習法であり、それはイスラム教と遊牧民の部族制度の秩序が混在したものである<sup>15)</sup>。中村たちが現地で日常的に接触しているのは、パキスタン人であり、パキスタンとアフガニスタンのパシュトーン人であり、ときにはアフガニスタンの非パシュトーン人である。上述のように、中村・ペシャワール会の活動には、パキスタン人とアフガニスタン人、パシュトーン人と非パシュトーン人、都会のアフガニスタン人と農村のアフガニスタン人、さらにイスラム教徒（一般市民）とキリスト教徒（主に病院関係者）の間で、紛争、確執など対立要因が多様に絡んでいた。そのうえ、現地には一般人に銃器が出回っており、日常的に治安は不安定であった。

ソ連の占領中は、米国・サウジアラビアなどが支援するゲリラ・ムジャヒディーン、ソ連の

11) 中村は、中学3年のクリスマスの際に、同教会で洗礼を受けている。しかし、次第に派遣母体JOCSと意見が合わなくなっていくなかで、中村の妻がキリスト教徒でないことが非難される一幕もあり、キリスト教徒として自分の活動を意義付けることがなくなっている（中村、前掲『ダラエヌールへの道』261-262頁。丸山、前掲『ドクター・サーブ』66、277頁）。本論では、これ以上、キリスト教徒としての中村には言及しない。

12) 丸山、前掲『ドクター・サーブ』90-98頁。

13) 福元、前掲『伏流の思考』28頁。

14) 渡辺光一『アフガニスタン—戦乱の現代史—』岩波書店、2003年、17-18頁。

15) 中村、前掲『ペシャワールにて』79頁。

撤退後は、パキスタンの支援するパシュート系のラバニ、ヘクマティエル、タリバーン、イランの支援するシーア派ハザラ人、タジク人のイスマイル・カーン、マスード司令官、ウズベキスタンの支援するウズベク人のラシッド、ドスタム将軍、タジキスタンの支援するタジク人のアフマド・シャー、マスードの軍事勢力・軍閥が各地に割拠していた<sup>16)</sup>。中村・ペシャワール会はつねに、活動の場を確保するために、軍閥と不即不離の関係で接触するが、一定の距離を保つようにしてきた<sup>17)</sup>。

都市のペシャワールは別として、中村・ペシャワール会の医療活動のフィールドは、基本的に山岳地帯であり、その渓谷であった。アフガニスタン山地の診療所は、3千メートル前後の高度にあった。ここ20年間にわたる彼らの活動は、3期に分けられる。第1期（1984～90年）は、中村医師が主に日本キリスト教海外医療協力会の枠内で、パキスタン内で活動していた時期である。しかし、彼の活動は、同会の方針と次第に食い違っていくようになっていった。結局彼は、2期の勤務を果たした後に、1990年に同会の派遣医師であることを辞めることになった。その後、第2期（1990～2000年）では、彼は、アフガニスタン北東辺境山岳地帯の貧農向けの医療活動を行うために、活動範囲をアフガニスタンに広げていった。その活動を財政的に支援したのが、ペシャワール会である。この時期には、少数ではあるが、日本から直接に現地の支援活動に赴く者が増えてきた。第3期（2000年～現在）には、中村とペシャワール会は、飲料水源の確保、大規模な灌漑施設の開設、パイロット農場の運営など、農村再生活動を始めた。彼らの活動は、医療活動以外にも展開されるようになった。



出所：<http://www.wla.biglobe.ne.jp/peshawar/eg/annai.html>  
(アクセス2005年10月1日)をもとに筆者修正

16) Ahmed Rashid, *Taliban*, New Haven: Yale University Press, 2001.

17) 福元、前掲『伏流の思考』136-137頁。

表1：会計報告（一般会計・特別会計の合算）

	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
<b>収入（千円）</b>																				
1. 会費・寄付	7,417	6,906	7,261	6,483	7,288	12,555	16,148	20,016	33,771	62,843	47,925	58,382	77,061	72,934	49,778	56,529	105,633	940,061	398,100	290,485
2. 補助金等	0	0	0	0	0	3,600	7,000	9,894	24,963	37,350	31,042	38,384	27,967	25,758	29,268	33,376	16,617	18,616	7,636	0
外務省						3,600	7,000	6,344	15,467	11,320	8,000	8,500	7,500	7,770	5,000	4,500	0	0	0	0
国際ボランティア貯金								3,550	9,496	19,638	21,062	28,072	18,091	15,905	22,568	27,727	16,617	18,616	7,636	0
その他										6,392	1,980	1,812	2,376	2,083	1,700	1,149	0	0	0	0
3. 収益事業収入	110	234	436	315	0	215	849	234	645	400	240	2,599	1,089	1,876	1,515	5,021	5,062	14,565	3,752	408
ガレージセール、書籍販売、講演料等																				
4. 利息雑収入	50	4	56	32	60	57	39	56	454	240	210	44	46	410	56	8	18	514	39	49
計	7,576	7,144	7,753	6,830	7,348	15,427	24,036	30,200	59,833	100,833	79,417	99,409	106,163	100,978	80,617	94,934	127,330	973,756	409,527	290,942
前年度からの繰越金	2,692	4,158	2,628	1,284	1,656	1,737	921	1,714	1,023	6,960	12,271	9,188	20,619	27,891	4,155	11,845	25,434	54,405	83,536	222,684
総計	10,267	11,302	10,382	8,114	9,004	17,164	24,957	31,914	60,856	107,791	91,688	108,596	126,782	128,869	84,772	106,779	152,765	1,028,160	493,063	513,626
<b>支出（千円）</b>																				
1. 現地協力費	4,373	7,324	7,786	4,822	5,128	13,489	19,734	26,844	49,940	72,523	77,396	82,921	93,567	111,039	*66974	70,800	91,415	*273584	249,071	204,820
医療サービス	4,373	7,324	6,364	4,822	5,128	11,715	16,911	23,759	47,366	70,488	73,471	80,424	85,197	104,355	*66974	63,535	51,739	81,654	91,159	82,366
中村活動支援	4,373	5,824	4,263	3,635	3,466															
JAMS運営費						11,715	16,911	23,759	47,366	67,802	65,206	56,564	59,531	39,422	25,708					
PLS運営費											8,265	23,860	15,660	20,190						
PMS運営費															41,265	63,535	51,739	81,654	65,566	60,103
サンダル工房開設費		1,500																		
ジープ(1台)購入費			2,101																	
マラリア緊急対策費										2,686										
PMS病院建設費													10,006	44,743						
診療所建設費等																			25,593	22,263
農村開発費・緊急援助費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30,968	180,150	135,290	88,993
水資源確保事業																	30,968	12,616	41,655	44,405
農業支援事業																			380	612
灌漑用水路																			93,255	43,976
緊急援助「いのちの基金」																		167,534		
雑費	-	-	1,422	1,187	1,632	1,774	2,823	3,085	2,574	2,035	3,925	2,497	8,370	6,684	6,100	7,266	8,708	9,647	22,622	33,460
J現地日本人ワーカー													5,755	3,800	3,759	3,442	5,359	7,025	17,994	20,969
渡航費・通信費			1,197	887	1,383	1,344	1,095	2,280	1,417	1,246	2,368	1,671	1,323	1,861	1,497	2,314	2,672	486	2,161	5,844
国内活動費			225	300	249	430	1,728	805	1,157	789	1,557	826	1,292	1,024	844	1,510	677	2,136	2,467	6,647
2. ニュースレター・広報費	840	697	580	826	1,082	1,436	1,905	1,931	1,810	1,905	2,408	2,172	2,380	2,311	2,452	3,237	3,743	6,667	8,811	7,377
3. 事務局費	896	652	705	810	1,087	1,319	1,604	2,116	2,146	3,293	2,697	2,884	2,944	2,709	3,502	2,720	4,175	13,238	12,497	15,827
4. 補助金返却																4,588			1,136	
5. いのちの基金																		650,000		
計	6,110	8,673	9,071	6,458	7,267	16,243	23,243	30,891	53,896	77,721	82,500	87,977	98,891	116,059	72,928	81,345	99,333	944,624	270,379	228,024
翌年度への繰越金	4,157	2,629	1,311	1,656	1,737	921	1,714	1,022	6,960	30,070	9,188	20,619	27,891	12,809	11,845	25,434	53,433	83,536	222,684	285,601
総計	10,267	11,302	10,382	8,114	9,004	17,164	24,957	31,914	60,856	107,791	91,688	108,596	126,782	128,869	84,772	106,779	152,765	1,028,160	493,063	513,626

注：\*データ不整合

資料：ベシワール会報，Nos. 6, 9, 12, 16, 20, 24, 28, 32, 36, 40, 44, 48, 52, 56, 60, 64, 68, 72, 76, 80.

20年間に、ペシャワール会の財政規模は、1984年の611万円から2003年の2億2800万円に拡大している。この間、活動分野は時期毎の特徴をもって発展してきた。このことは、ペシャワール会の支出費用項目の変化に明瞭に反映している（表1参照）。

第1期（1984～90年） 中村医師は、日本キリスト教海外医療協力会の枠内で、パキスタンで活動していた。医療活動の主要任務は、ハンセン病患者の治療であった。しかし、彼はこの病気について、ほとんど知識を持っていなかった。周知のように、今日の日本では、ハンセン病患者はほとんどみられない。そこで、彼は、ペシャワール派遣が決まったあと、赴任までの間に、1983年6月に岡山県の国立療養所邑久光明園（ハンセン病療養所）で研修をした。その後、彼は、1983年9月～84年4月に英国リバプール熱帯医学校（Liverpool School of Tropical Medicine）で熱帯病の研修を受けた。以上に加えて、ペシャワールで1年間、勤務した後、1985年6月から2ヶ月間、韓国のウィルソン・ハンセン病センターで再建手術の訓練を受けた。

実際、ハンセン病の治療には、再建手術、形成外科、神経外科、皮膚科などの医療技術や、ソーシャル・ワークを必要とする。しかし、当時のミッション病院のハンセン病棟の設備は、非常に貧弱であり、オープン式消毒器（相当古い）、処置用トロリー、ピンセット、聴診器（壊れている）、注射器（清潔でない）などに限られていた。入院施設は、取り扱い患者数が2400人であったのに、16床しかなかった。中村が最初にしたことは、1984年5月に、ハンセン病棟の1室を小手術室に改造したことである。これに加えて、彼は、患者のリハビリテーションに精力を傾注した。たとえば、1986年4月に病院内にサンダル工房（ワークショップ）を開いた。その目的は、患者の足を感覚障害による足底穿孔症（うらきず）から守るために、安全なサンダルを供給することにあつた。そのサンダルの構造は、現地のサンダルを徹底的に調査して、「地元スタイル」に似せて<sup>18)</sup>、作り出した改良型であった。

アフガニスタンに目を移すと、1980年代のアフガニスタンは、大変な混乱の中にあつた。ソ連軍は、1979年12月にこの国に侵攻したが、これに抵抗するゲリラ・ムジャヒディーン戦士との激しい戦闘が続いた。最終的に、1989年2月にソ連軍は、アフガニスタンから完全撤退した。しかし、その後も、元ゲリラであった軍閥間の凄惨な内戦が続き、そのなかから、タリバーンが勝ち抜き、1996年9月に首都カーブルを占拠して、全国を制覇しかかった。この20年間に、数百万の人たちが難民として、パキスタンとイランに逃げ、また国内でも、数十万の人々が戦闘状況に応じて、国内難民となった。しかし、パキスタン内の難民キャンプは、単純に難民のためのキャンプとはいえなかった。そこには、アフガニスタン内での戦闘に向けての軍事的キャンプという副次的機能もあつた。

このような状況を受けて、ペシャワール会は、1987年4月にアフガン・レプロシー・サービス（Afghan Leprosy Service）を開設した。その目的は、パキスタン北西辺境州のアフガニスタン国境近くの難民キャンプでアフガニスタンの人たちに向けて医療活動をする事、それと合

---

18) 中村、前掲『ペシャワールにて』65頁。

わせて、辺鄙な山岳地帯でハンセン病患者を探し出すことであった。中村とアフガニスタン・スタッフは、戦闘地帯の難民キャンプに小規模な巡回診療所を作り、難民のアフガニスタン人患者を治療した。

1989年1月に、ペシャワール会はアフガン・レプロシー・サービスを改組して、日本—アフガン医療サービス（JAMS=Japan-Afghanistan Medical Service、以下JAMSと略）とした。その目的は、アフガニスタンの農村地帯でハンセン病患者だけでなく、一般患者に向けても、ほぼ無料で医療サービスを提供することにあった。そのためには、診療所を開設する必要があった。アフガニスタンで働くスタッフは、中村以外はすべてアフガニスタン人であった。

このようにして、中村の活動は、次第に日本キリスト教海外医療協力会の方針から外れることになった。すなわち、同会は、発展途上国のキリスト教系ミッション病院に人材を派遣するが、医療分野においても、財政的、物質的援助は差し控えるというものである<sup>19)</sup>。中村は、ペシャワール会が募金した特別基金の一部を使って、サンダル工房を1986年に開いたが、これも日本キリスト教海外医療協力会の方針に反することであった。さらに、中村は、1987年1月にパキスタン北西辺境州でアフガニスタン難民のために難民キャンプでの医療活動を始めていた。その財政源として、1986年にジープ1台を買うために募金した特別基金の一部が充当され、またペシャワール会の一般会員の会費もこれに向けられた。それだけではない。ペシャワール会は、活動資金として1989年から外務省の補助金を受け取り、また1991年から郵政省の国際ボランティア貯金からの寄付を受けることになった<sup>20)</sup>（表1参照）。このような事情もあり、1990年6月に、中村は2期、6年間の勤務を終えて、日本キリスト教海外医療協力会との関係を絶った。

第2期（1990～2000年） 1990年代に、中村は、アフガニスタン北東辺境山岳地帯で貧農向けの医療活動を展開した。その活動を財政的に支援したのは、ペシャワール会である。ペシャワール会は、JAMSの運営を通じて、アフガニスタン内部まで、活動領域を拡大した。アフガニスタンでは、1992年4月にカーブルの共産党政権が崩壊すると、難民の農民は、内戦が進行していても、ジルガ（Jirga 伝統的長老会議）の再建とあわせて、自らの意志で帰宅し始めた。日本—アフガン医療サービスはすでに1991年12月に、アフガニスタン・ニングラハル州の北東山岳地帯の寒村（これまでに近代医療施設をもたない）ダラエヌール（Dara-e-Noor）に診療所を開設していた。この診療所は、その後事業展開の基地となるものであった。1992年12月には、ダラエヌールの西方で渓谷の上流の高地・クナール州ダラエピーチ（Dara-e-Paich）に診療所、1994年4月には、ダラエヌールの北方で、より上流のクナール州ダラエワマ（Dara-e-Wama）に診療所を開設した（地図参照）。彼は地域のジルガの役割を重視しており、その農

19) 日本キリスト教海外医療協力会「基本方針第6章海外派遣第3項(2)」  
<http://www.jocs.or.jp/houshin.htm/>（アクセス2005年7月29日）。

20) 外務省補助金は1989年から99年までで、総額8千5百万円である。国際ボランティア貯金からの寄付金は、1991年から2002年までで、総額2億9百万円である（表1参照）。



村での活動は、すべて地域でジルガの了解を得て進められることになる<sup>21)</sup>。

1993年11月、悪性マラリアがダラエヌール地方を襲ったとき、ペシャワール会は、日本国内で大規模なキャンペーンを展開し、救援の基金を集めた。その金は、パキスタンでマラリア治療用の薬を買って、それをアフガニスタンの患者に送ろうというものであった。当時のスローガンは「人の命、1人220円」<sup>22)</sup>であった。その結果として、日本全国から2千万円以上の募金が寄せられ、それは、アフガニスタンのJAMS系列診療所で2万人以上の患者を救うために用いられた。

さらに、ペシャワール会は、アフガニスタン内の診療所に加えて、1995年4月にパキスタンの最北方山岳地帯のラシュト (Lasht) で定期的診療活動を始めた。その後、1998年9月にはラシュト診療所 (5月～11月に開き、冬季は閉鎖) が開設された (地図参照)。パキスタンでは、もう1ヶ所、1999年11月にコースタン (Kohistan) のある村に診療所が開設された (この施設は、その地の安全が保障されないために、2001年5月に一時的に閉鎖され、2002年6月には完全閉鎖となった)。2004年末まで、アフガニスタンとパキスタンの診療所は、近代的医療が届かない山岳地帯で、社会的政治的困難のなかで、土地の人々に医療活動を保障し続けてきた (治療件数については表2参照)。

話を1990年代に戻すと、1994年10月に、ペシャワール会は、ペシャワール・レプロシー・サービス (PLS=Peshawar Leprosy Service) を創設した。これは、ペシャワール会派遣のメンバーがペシャワール・ミッション病院の病院長と一連の衝突を起こした後に、ミッション病院から独立するための手立てであった。このとき、ペシャワール会は同時にペシャワール会・リハビリテーション・エクステンション・プログラム (Peshawar-kai Rehabilitation Extension Program) を創立し、パキスタンの北西辺境州政府から社会福祉法人としての公的資格を承認され、パキスタン内に活動の拠点を残すことができた。このプログラムの主要目的は、パキスタンにおけるペシャワール・レプロシー・サービスの医療活動を運営することであった。

同じとき、ペシャワール会とJAMSの対立が顕在化した。ミッション病院から追い出されたPLSメンバーが、JAMS病院の一隅に一時間借りしたが、JAMS側はその受け入れに冷淡であった。アフガニスタン人のJAMSは、パキスタン人とハンセン病患者に冷淡であった。さらに、当時のJAMSは、1人のアフガニスタン人医師の強力なリーダーシップの下で、次第に農村の貧者への医療活動に関心を失い、カーブルからの避難者・中上流階層の一般診療に傾き、都市のミニ総合病院化しつつあった。ペシャワール会にとっては、JAMSを本来の軌道に戻さねばならなかった。

最終的には、ペシャワール会は、1996年にペシャワールに自営の病院を建設することを決めた。この計画によって、1998年11月にペシャワール郊外に70床の基地病院を建設した。病院開

21) 農村に無医村があっても、アフガニスタン、パキスタンの全体では、むしろ医者は不足していない。

22) 中村、前掲『医は国境を越えて』164-165頁。このスローガンは「アフガニスタンでマラリア大流行」を伝える新聞の見出しから、取ったものである。

設によって、ペシャワール会は、ペシャワール内外の医療活動を全面的に支援し、指示することができるようになった。新しい病院を運営するのは、ペシャワール会・メディカル・サービス（PMS=Peshawar-kai Medical Services）である。これは、1997年12月に前のペシャワール・レプロシー・サービスと、前のJAMSを併合することで成立したものである。この併合は、それまでのJAMSを解消するための方策でもあった。

表2：各診療所の診療数

	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
			(no data)													
外来患者数																
JAMSペシャワール診療所/病院	3,238	7,732		29,158	45,029	48,584	53,804	82,078	45,641	41,657	25,259	30,171	-	-	-	-
PLS病院									4,823	10,174	13,159	-	-	-	-	-
PMS病院												35,891	56,585	61,343	46,062	50,537
ダラエヌール診療所				-	36,634	47,205	34,211	39,642	28,408	30,363	21,768	22,884	29,286	35,900	34,572	42,680
ダラエピーチ診療所					2,282	28,058	21,734	31,971	29,492	32,131	15,052	21,969	34,041	34,733	30,683	35,500
ワマ診療所							13,503	20,588	21,200	24,452	13,748	17,519	17,991	16,264	11,786	14,969
ラシュト診療所												1,825	3,978	4,926	3,508	4,584
コーヒスタン診療所												9,165	14,266	237	1,271	-
テメル・ガール診療所				7,490	13,093	12,202	18,564	14,165	9,970	-	-	-	-	-	-	-
難民キャンプ・移動診療所	5,160	4,965		5,134	4,065	8,601	2,634	7,155	3,176	2,263	1,066,650	-	7,452			
カーブル臨時診療所(5ヶ所)													12,365	114,365	17,446	-
計	8,398	12,697		41,782	101,103	144,650	144,450	195,599	142,710	141,040	1,155,636	139,424	12,365	267,768	145,328	148,270
入院患者数																
JAMSペシャワール診療所/病院		241		398	667	735	928	1,090	965	619	337	259	-	-	-	-
PLS病院									551	580	492	-	-	-	-	-
PMS病院												834	1,051	1,278	1,841	1,773
計		241		398	667	735	928	1,090	1,516	1,199	829	1,093	1,051	1,278	1,841	1,773

資料：ペシャワール会報，Nos. 20, 24, 32, 36, 40, 44, 48, 52, 56, 60, 64, 68, 72, 76, 80。

第3期（2000年以降） 中村とペシャワール会は、飲料水源の確保、大規模な灌漑施設の開設、試験農場の運営など、農村再生支援活動を始めた。彼らの活動は、医療活動以外に展開されることになった。2000年6月に、アフガニスタンの診療所で、下痢の患者が急激に増えた。その大多数は子どもであった。その原因として考えられたのは、ヒンズークシュ山系雪解け水の不足による深刻な旱魃に襲われたこの地域で、人々は水不足のために、汚染した水を飲まねばならなかったことである。この年の6月にペシャワール会は、飲料水源確保プロジェクト（Water Supply Project）を開始した。その考えは、赤痢、アメーバ性赤痢、チフスなどの腸管感染症を治すには、きれいな水の供給が先決であり、このことはこれまでの医療活動の延長上にある、という考えによっていた。中村の言葉によれば「病気はあとでも治せるからまず生き

ておりなさい<sup>23)</sup>。」計画は、地域で井戸を、手掘りとハンドボーリングの組み合わせで掘ることから始まり、次第に枯れたカレズ（伝統的な地下用水路）を復活することに進んだ。2001年10月段階で、ペシャワール会が地域の人々を助けて、掘った飲料用井戸数は、6百以上に達した（表3参照）。ペシャワール会は、このとき、現地の人々に財政的、技術的援助を提供し、また掘削事業の運営にあたった。彼らは、当時国連がタリバーン政権への経済制裁（とくに食糧制裁）をするなかで、国際援助機関やその他のNGOがアフガニスタンを去ることを選んだ時期であったのと対照して、このときの自分たちの活動は際立っていた、と自負する。

ペシャワール会は、2001年10月に、米国のアフガニスタン空爆で避難したアフガニスタンの国内難民に向けて、食糧を配るために、日本で「いのちの基金」(Funds for Life) を結成した。同会が集めた基金は、8億円以上に上った。この資金をもって、彼らは、パキスタンで小麦粉1884トン、料理用油167キロ・リットルを買い、カーブル、ジャララバードなどで、アフガニスタンの人々（2001年10月19日から2002年3月30日までに27,339の家族）に配った。結局、この計画は、2002年2月までに15万人の人々に向けて、食糧を供給したが、その後、国際機関や種々の救援グループが戦争の被害者を救済に赴いたので、ペシャワール会は、独自の計画を終えることにした。

食糧計画のほかに、ペシャワール会は、2001年3月から2002年6月の間、カーブルに5ヵ所の臨時診療所を開設したが、当時は、カーブルにこれ以外の外国医療施設は存在しなかった。彼らは、タリバーン政権崩壊後、カーブルに外国から支援団体が登場し始めると、カーブルから診療所を撤退することにした。それは、彼らの支援がなくとも、医療が当地の人々に行き届くようになったからである。彼らは他の人々が出て行くときに入っていく、他の人々が入ってくると、彼らは出てくる。

2002年1月に、ペシャワール会は、これまでの基金（「いのちの基金」など）の残金（1億3千万円余）を使って、「緑の大地計画」(Green Ground Fund for Afghanistan) を始めた。これは、戦争と飢饉で疲弊したアフガニスタン農村で農業再生のための一連の計画である。この計画では、第1に、1年半まえに始めた農業用灌漑水確保のための計画を継続することである。2004年9月段階で、ダラエヌール渓谷でカレズの復旧計画を進め、これまで早魃で砂漠化した地域で、38のカレズを復旧した。ダラエヌール地域で、土地の人々を助けて、11個の巨大灌漑井を掘ることに成功した（表3参照）。1181ヶ所で、水源が回復され、使用可能となった。これらの復旧作業の結果、約1千家族（約1万人）が、水不足のために放棄していたもとの村に帰ることが可能となった、といわれる。現在まで、農村地域再生のための灌漑計画は、2001年以来の米国のアフガニスタン空爆の間も継続されている。ペシャワール会は、アフガニスタンの農民がケシ栽培を止めても、農業の生産性を高めることで、自給できることを狙っている。計画の第2に、同様の目的をもって、2003年3月に、東アフガニスタンのクナール川の豊富な

23) 中村、前掲『医者よ、信念はいらぬ、まず命を救え！』37頁。

水を利用するために、全長14キロメートルのアブ・エ・マルワリド用水路（Ab-e Marwarid Canal）を建設し始めた。この長い用水路の1部として、水門、貯水池、堰、2キロの水路が、2004年3月に完成し、2005年4月から1部灌漑が始まっている。現場は巨大土木事業である。2003年度には延べ14万人の作業員が働いた（主に農民であり、労働賃金を得ることができた）。2005年3月現在で、ダンプカー32台、掘削機（ユンボ）7台、ローダー5台、削岩機2台、ローラー4台が投入されている。計画では、用水路の灌漑は、農地1千5百エーカーに及び、これによって、7万人の農民が生きていけるはずになっている。計画の第3は、試験農場である。この農場は、約8千平米の大きさであり、場所はダラエヌール溪谷にある。そこでは、現地の農民と協力しながら、2～3人の日本人農業専門家が、有機農業に基づきながら、乾燥土に適合した新しい穀物、野菜の移植を試み、また乳製品の生産に向けて畜産を広めようと試みている<sup>24)</sup>。

表3：水源確保プロジェクト

	水源確保・作業地					利用可能水源				
	ダラエヌール溪谷			その他	総作業地	# 総計	# 井戸	# 灌漑井	# カレーズ	#(完成)
	# 井戸	# 灌漑井	# カレーズ	# 井戸	# 総計数					
2000年6月	10				10					
2000年12月	35		30	284	349	204	177		27	78
2001年1月	42		35	278	355					
2001年11月	59	1	38	560	658	603	573	1	30	455
2002年2月	81	1	38	579	699	557	529	1	28	429
2002年12月	150	5	38	704	897	848	820	5	28	760
2003年6月	200	5	38	757	1000	932	889	5	38	899
2003年12月	269	11	38	776	1094	1030	983	9	38	1007
2004年6月	325	11	38	848	1217	1217	1128	11	38	1086
2004年9月	340	11	38	889	1278	1278	1181	11	38	1146

資料：http://www1m.mesh.ne.jp/~peshawar/wp/wsp03.html（アクセス2004年10月25日）

**現段階** 2003年11月2日、アフガニスタン・クナール州の用水路の建設現場で、上空を飛来した米軍の攻撃用ヘリコプター2機が、作業場の発破作業を地上からの攻撃と誤認して、その場所を機銃掃射した。これは、アルカーイダ掃討の軍事作戦の一環であったが、警告的射撃に終わって、被害者は出なかった。しかし、自分たちの生活再建のために汗を流している現地の人々が、その地域に安定を取り戻すことを公言している米軍の軍事作戦によって、攻撃の目標にされたことは、間違いない。中村は「復興支援が軍事介入とセットとなっている」米国のや

24) 2003年度の支出では、医療サービス8,237万円の他に、水資源確保事業4,441万円、灌漑用水路建設4,398万円、農業支援事業61万円であり、現地日本人ワーカー費2,100万円である。

り方に抗議の声を高め、それはアフガニスタン民衆の「民意とかけ離れたものになっている」ことを強調した<sup>25)</sup>。

ペシャワール会は、2003年7月現在で、パキスタン内に病院（PMS病院）、診療所（ラシユト）、事務所、各1ヶ所を持ち、アフガニスタン内に3つの診療所（ダラエヌール、ダラエピーチ、ダラエワマ）、支部事務所、スタッフ・ハウス3軒を持っていた（地図参照）。2004年5月現在、パキスタンとアフガニスタンの両地で、日本人スタッフ数は19人、現地スタッフは250人であった（日雇いの作業員を除く）。2003年で、全医療機関での治療総件数は約16万であり、医療スタッフ110人が働いていた（これまでの診療実績は表3参照）。病院では、藤田千代子など日本人看護師の役割は、重要である。それは、イスラム世界に住むアフガニスタン、パキスタンの女性患者は、家族以外の男性に対しては、たとえ医者であろうと、その身体を見せようとしなからである。藤田看護師は、病院の副院長として、病院の運営にも関係している。なお日本の会員数は、2005年7月現在で12500人である。

2005年1月に、ペシャワール会は、ダラエピーチとダラエワマの診療所を失うことになった。それは、米国指導下のカーブル政権が全国的に外国医療支援団体を支配し、担当地域を決めたことから、発生した。中村が危惧するように、手放された診療所がこれから実際に機能するかどうかは、疑わしい。中村の言葉では「最後の交代チームが戻ってきたとき、心の中で泣きました。心ない軍事活動や外国団体の功名心、患者を思わぬご都合主義、これが『アフガンの再建』なのかと、大切なものが踏みにじられた思いでした<sup>26)</sup>。」

このように、中村・ペシャワール会の活動は、アフガニスタンの艱難の20年間を通じて続てきたもので、松原の上述の表現によれば「現地に根づいた活動」「地道な努力」「地に足のついた事業」として、「超大国の力のおごり」に対して、異なる文明、文化の人々が共存していく道を示唆するものである。

### Ⅲ. 中村哲の世界認識

組織としてみると、ペシャワール会は、現地で活動する中村医師・医療関係スタッフ・農村復興支援スタッフ、福岡で事務局を運営する人々、および全国的な一般会員・賛助会員から構成されている。活動レベルでは、彼らは同一のNGOの活動家・支援者として、上述の「振り子」の関係があるものの、そのときどきに総体として一体である、とみることができる。しかし、思想レベルでは、たとえば中村と一般会員・賛助会員は同一とは思えない。これら会員の思想は、現地活動を支援する点では共通としても、それ以上の点では一様でないと思われる。

25) *Point of View / Tetsu Nakamura : Military action prompting Afghan backlash*, International Tribune / The Asahi Shimbun, December 13, 2003

(<http://www1m.mesh.ne.jp/~peshawar/eg/naka13dec03.html> / access on 27 December 2003)。中村哲「アフガン復興、軍とセットの援助に反発」『朝日新聞』2003年11月22日。

26) 『ペシャワール会報』No. 83、2005年4月18日、4頁。

本論では、中村が、どのような言説をもって、自分たちの行動を説明し、またそれを意味づけるかを明らかにしたい。それは、彼自身のアイデンティティ論でもある<sup>27)</sup>。

心情 中村の個人史としては、父は戦前の社会主義者で戦中の転向者であり、母は「古いタイプの日本の庶民」であるが、宮本百合子（夫は日本共産党員の宮本顕治）著作の愛読者でもあった。母方の祖父は、九州若松の沖仲士業者玉井金五郎であった。母方の伯父には小説家の火野葦平（『麦と兵隊』の著者）がいた。父は息子につねに「お前は日本のために役立つ人間になれ」と言っていた<sup>28)</sup>。家族環境がストレートに中村の思想形成につながったとは言えないであろうが、彼の周囲には、彼の精神を育てていく独特の心情的雰囲気があったと思われる。彼自身によると、「やむにやまれぬ大和魂ですたい<sup>29)</sup>」というモチベーションの説明や、「ここで引き下がっちゃ男が頼る<sup>30)</sup>」という生き方の表明には、彼を取り巻く福岡や若松の風土が反映している、といえよう。さらに「ペシャワール会と現地事業を支えてきたものは、『ご縁』とも言うべきで、自然な人と人との出会いと結び付きである<sup>31)</sup>。」という「縁」の強調や、「理屈を言うよりいかに現実的に現地を助けるか<sup>32)</sup>」という「理屈」主義の否定の仕方には、彼の知的風土が関係しているようである。

中村の言葉によれば、現地での彼らの活動に関して「私たちを支えてくれたのは、国際協力や国際化の時流ではない。泥くさい義理人情や素朴な共感というほうが近い。…私たちを支えてきたのは、理屈ぬきの情愛とまごころ。そうして、血の濃さに匹敵する絆が生まれてくるのでしょう<sup>33)</sup>。」その「情愛」と「まごころ」と「絆」は、次の言葉のように、アジアの人々に向けられる。

「アジアとその人々を忘れては我々のアイデンティティも無くなる」というのが我々の一貫した態度であった。…私を背後から強力に支えてきたのは、こうしたアジアの同胞への思いを込めた人々の熱い祈りと現地の協力である<sup>34)</sup>。

信念 中村は、2004年のイーハトーブ賞（宮沢賢治学会主催）の受賞に際し、「わが内なるゴースト、愚直さが踏みとどまらせた現地」と応答し、宮沢賢治の「このなかで、いちばんえ

27) 馬場伸也によれば「アイデンティティ」とは、(1)「歴史の創造に主体的にかかわっていかうとする自我である。そうすることによってこの自律的自我は、同時に、自己実現を計ろうとする。……このように、……歴史における自己の存在証明を求めることである」、(2)「自己の内・外部に、自分がなにものであるかを確立することである。」(馬場伸也『アイデンティティの国際政治学』東京大学出版会、1980年、7、9頁)。

28) 丸山、前掲『ドクター・サーブ』264-265頁。中村、前掲『医は国境を越えて』334頁。中村、前掲『ダラエヌールへの道』253-254頁。

29) 中村、前掲『ダラエヌールへの道』205頁。

30) 中村、前掲『医者よ、信念はいらない、まず命を救え!』89頁。

31) 中村、前掲『ダラエヌールへの道』206頁。

32) 同上書、206頁。

33) 中村、前掲『ほんとうのアフガニスタン』121頁。

34) 中村、前掲『ペシャワールにて』251頁。

らしくなくて、ばかで、めちゃくちゃで、てんでなっていないくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ」(『どんぐりと山ねこ』)を引用している<sup>35)</sup>。この韜晦した表現は、中村からみて自分の心情と信念を一番うまく表現しているのであろう。

ペシャワール会の活動の基本方針は「誰もが行きたがらない所に行き、誰もがやりたがらないことをする<sup>36)</sup>」である。彼らは、アジアの辺鄙な町や村で土地の人々、とくに社会的経済的弱者の生存と生活を保障しようとし、そのために人々の生活基盤形成に最大の関心を寄せる。中村によれば「我々には何の思想的な背景もないが、唯一の絶対に譲れぬ一線は『現地の為に医療人として働く』ことである<sup>37)</sup>。」彼らは「アフガニスタンの共同体と共存できる医療体制<sup>38)</sup>」をしようとしている。彼らからみれば、欧米NGOのアフガニスタン復興援助は「伝統無視の近代化プラン」であり<sup>39)</sup>、「巧みな論理で組まれたプロジェクトは、巧みな器用さで総括され閉じられてゆく<sup>40)</sup>。」彼は東京発の「国際援助」にも懐疑的である。「トウキョウ」は「拝金主義と効率主義で人間を痴呆にした東京、人情を忘れさせ相互援助を溺死させた東京、アメリカ化してアジアの心を失った東京」である<sup>41)</sup>。ペシャワール会広報担当理事の福元は、ペシャワール会がこれまで持続できたのは、それが東京になかったからである、と主張する<sup>42)</sup>。

ペシャワール会は「地域の文化や慣習についてはいっさい、良い/悪いの判断をしない<sup>43)</sup>」ことを基本姿勢としているが、現場では、中村は、現地の医療補助者に対して「彼らに誇りを持たせること<sup>44)</sup>」を心がけている。それと同時に、現地スタッフの管理については、彼が述べるように「日本で想像されるほどヤワなものではありません。」「院内で肝を冷やすような不祥事が続き、綱紀肅正を掲げて大掃除」を行い、「軍紀以上の規律を徹底し、違反者を容赦なく処断」している<sup>45)</sup>。処断は解雇にまで及んでいる。

彼は、自分の行動原則を「命を大切にすること」に加えて、「三無主義」と規定する。「三無主義」とは「無思想」「無節操」「無駄」である。このうち、「無思想」とは「特別な考えや立場、思想信念、理論に囚われないこと」であり、「無節操」は「誰からでも募金を取ること」である。「無駄」とは「無駄なことをした」と失敗をあとで素直に認められないと、成功は生まれえないという意味である<sup>46)</sup>。あえて付け加える必要はないであろうが、ここで彼が「無思想」と言っているのは、思想が無いという意味ではない。それは、既成の特定の思想、理論と言われるものに縛られないという意味である。これ自体が思想であることは、いうまでもない。

35) 中村哲「わが内なるゴーシュ」『ペシャワール会報』No. 81、2004年10月13日、2-3頁。

36) ペシャワール会 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/> (アクセス2005年7月30日)

37) 中村、前掲『ペシャワールにて』182頁。

38) 中村、前掲『アフガニスタンの診療所から』112頁。

39) 中村、前掲『ペシャワールにて』232頁。

40) 同上書、237頁。

41) 同上書、212頁。

42) 福元、前掲『伏流の思考』26頁。

43) 『中村哲さん講演録』47頁。

44) 中村、前掲『ペシャワールにて』56頁。

45) 中村、前掲『辺境で診る、辺境から見る』54頁。

46) 同上書、118-121頁。前掲『中村哲さん講演録』108頁。

世界認識 以上のような心情と信念が、現地での中村の活動を彼の内面から説明するものであるとすれば、その活動の歴史的意義を明かすのが、彼の世界認識である。彼は、自らの世界認識の枠組みのなかに、自分たちの活動と自分たちの存在を位置づけようとする。

中村は、米欧主体の国際関係にきわめて懐疑的であり、日本が欧米諸国の亜流になることに批判的である。第一に、彼は「『大東亜』の夢は、経済戦争に形を変えて継続されてきたように見える。…日本の未曾有の経済的繁栄は、発展途上国の人々の血と涙の上に築かれたものである<sup>47)</sup>」ことに、日本人の注意を喚起する。第二に、彼は、カンボジアへの自衛隊PKO派遣(1992年)についても「PKOが『時代錯誤』の古い軍国主義ではなく、欧米主導の新国際秩序の時流に沿う『ナウイ』ものであったからこそ」反対であった<sup>48)</sup>。第三に、湾岸戦争で日本が米欧側の立場で戦争に関わったことを強く批判する。このような外交政策は、明治期以来の脱亜論の継続でしかなく、欧米諸国を尊敬し、アジア諸国とアジアの人々を軽視するものであるというのが、彼の主張である。それは、彼の次の言葉に明確である。

湾岸戦争の勃発以後、日本が多国籍軍に「断固たる支持」を表明し、強力な財政支援を決定した事は、現地イスラム住民の間に当惑と敵意を徐々に拡大してゆくだろう。明治維新以後、脱亜入欧で近代化に邁進してきた日本の舶来病は、ここに極まった。それは依然として日本人の主流が欧米世界を国際社会とし、発展途上国の立場に立てぬ無神経さを露呈したからである。ペシャワールというイスラム世界の片隅から見れば、日本で自明とされる「国際秩序」なるものは、「欧米秩序」であり、混乱と干渉を正当化するフィクションである<sup>49)</sup>。

このようにして、彼が恐れるのは、「我々が過去営々と築き上げてきた現地活動」が「欧米への卑屈な迎合とアジア世界への無理解とによって、一撃で突き崩される可能性」である<sup>50)</sup>。彼は、西欧と米国の世界支配に対して、警戒的である。それは、次の警告に明らかである。

(2001年9月に帰国して) 尽きぬ回顧の中で確かなのは、漠々たる水なし地獄の修羅場にもかかわらず、アフガニスタンが私に動かぬ「人間」を見せてくれたことである。「自由と民主主義」は、今テロ報復で大規模な殺戮戦を展開しようとしている。おそらく、累々たる罪なき人々の屍の山を見たとき、夢見の悪い後悔と痛みを覚えるのは、報復者その人であろう<sup>51)</sup>。

問題なのは、空爆だけでなく、米国指導の復興支援も問題なのである。それへの警告は、彼

47) 中村、前掲『ペシャワールにて』101頁。

48) 中村、前掲『ダラエヌールへの道』190頁。

49) 中村、前掲『辺境で診る、辺境から見る』22頁。

50) 同上書、22頁。

51) 同上書、68頁。



の次の言葉となっている。

結局はアフガニスタンを空爆したのと同じ論理の援助がいま行われているのではないかということである。あそこには危険な勢力がある。それを潰してしまえという筋書きが作られ、その通りにことが運ばれつつあるように思われてならない。その意味では、いま行われている復興支援も本質的には空爆とそう変わらない。この不寛容と尊大さは、非西欧世界にとって危険な兆候である<sup>52)</sup>。

福元も述べるように「詰まるところ空爆の論理も復興の論理も、アフガニスタンという伝統的農村社会を否定・破壊し、西側世界をモデルとした『民主国家』をうち立てようというものである。そして空爆＝復興しようとする側は、自分たちが善であることを毫も疑わない<sup>53)</sup>。」と述べる。福元の主張によれば、非欧米世界の一国を空爆することと、その国に復興支援をすることとは、どちらも、西欧近代こそが世界中のすべての社会が従うべきモデルであるという考えに立つ点で、同じである。すなわち、まず非欧米世界の国は、欧米的基準で「民主的でない」と判断されると、空爆されねばならない。次いで、その国は欧米的基準で「民主的」となるようにと、復興支援を受けねばならない。破壊と復興のどちらでも、モデルは、内発的なものは許されず、欧米発の外発的なものが持ち込まれている。

中村は「ヨーロッパ近代文明の傲慢さ、自分の『普遍性』への信仰が、少なくともアフガニスタンで遺憾なくその猛威をふるったのである。」「(破壊についての)『謝罪』どころか、ほこらしげに『人道的援助』が破壊者と同じの口から語られるとすれば、これを一つの文明の虚偽とよばずしてなんである。」と述べる<sup>54)</sup>。彼は、日本の役割として「世界に冠たる平和国家として、(アジア世界で)相互扶助に活路を見出し、「欧米の高級クラブの一員としてではなく、アジアで共に喜び、共に悲しむ」ことを説く<sup>55)</sup>。

1992年(ソ連が支援するナジブッラー政権の崩壊後)にも2002年(米国のアフガニスタン攻撃後のタリバーン政権の崩壊後)にも、難民救助や国際復興支援のための国際機関とNGOの登場は、現地において、家賃の異常な高騰、物価の上昇、外国人に雇われるごく一部の人の賃金上昇などで、現地の経済構造をいびつなものにし、人々にさらなる貧富格差を招くものであった。そのうえで「数年を経ずして彼らが撤退してゆく<sup>56)</sup>」。

タリバーンの評価については、1996年9月27日にタリバーンがカーブルに無血入城したとき、「我々はむしろ、人々と共にタリバンによる治安回復を歓迎した<sup>57)</sup>。」中村は、タリバーンにつ

52) 中村、前掲『空爆と「復興」』44頁。

53) 福元、前掲『伏流の思考』16-17頁。

54) 中村、前掲『アフガニスタンの診療所から』192-193頁。

55) 中村、前掲『ペシャワールにて』252頁。

56) 中村、前掲『ほんとうのアフガニスタン』65頁。中村、前掲『辺境で診る、辺境から見る』82頁。

57) 中村、前掲『医は国境を越えて』275頁。

いて「いろんな意味で原理主義的というよりは、国粹的な政権で、アフガンの慣習法を徹底した」政権であって、「どんな政権でも一つの秩序は秩序」として、これに一定の評価を与えた<sup>58)</sup>。オサマ・ビンラーディンは、アフガニスタンの人々にとって「迷惑なお客様」であり、「渡さないけれど、自分で出て行って欲しい<sup>59)</sup>。」

中村は、タリバーン政権崩壊後のアフガニスタンについては、「私が見るかぎり確かに『自由』にはなった。ではその自由とは何かというと、…麻薬をつくる自由。逼迫した女性が売春をする自由。貧乏人がますます貧乏になる自由。子供たちが餓死する自由。この『自由』が解放されたわけですね。私が過去二十年いた中で最悪の時期をアフガニスタンは迎えるに至りました<sup>60)</sup>。」さらに米軍は「タリバンを潰すために反タリバンの軍閥に金と武器を準備した。この軍閥が治安を乱す原因になっている」ことを指摘する<sup>61)</sup>。タリバーンについて、上述のように、秩序の安定者として評価しており、初期タリバーンから権力者タリバーンへの変質と、彼らの背後にあるパキスタン軍情報部の支援をやや軽視しているようである。

中村は、現地でパキスタン、アフガニスタンの病院経営者、医者、職員などと、何度かの深刻な紛争を経験している。彼は現地の社会に対する冷静な観察者であり、強烈的な批判者でもある。しかし、彼は、それらを踏まえ、それらを越えたところで、アジアの人々と生きていこうとしている。

確かに、一面では、中村も福元も、反近代主義的である。しかし、中村、福元も、ある意味では徹底した近代的合理主義者でもある。そうでなければ、医療活動も、灌漑活動も不可能である。彼らが反対する近代主義とは、欧米の前例や基準をそのまま非欧米世界に適用しようとする非自省的近代主義である。ペシャワール会の事務局に集まる人々は、70年代安保世代、水俣病患者支援者、アジア好きなど、そのときどきに多様であるが、中央政府や国家権力への一定の距離感、欧米モデルの近代化論への強い疑惑、さらにアジアの弱者への連帯感などを共有している、と思われる。彼らは思想集団としては不定形である。

このように、中村は、いわば義侠的心情と、土着性と実践主義の信念によって、自分たちの行動を説明し、さらに欧米的近代化への批判を核とする世界認識をもって、自分たちの活動を意義付け、自分たちの歴史的な存在を証明しようとする。この心情・信念と世界認識をつないでいるのが、「アジアで共に生きる」というペシャワール会の信条である。この言葉は、はじめ中村から「アジアと共に生きる」として提示された。しかし、内部での議論の結果、「と」は「で」で置き換えられた<sup>62)</sup>。この差は、大きい。「と」では、国家と国家の関係、あるいは国民と国民の関係が払拭されないからである。その場合、民と民というトランズナショナルな関係が浮き彫りにされない可能性が残ってしまう。

58) 中村、前掲『医者よ、信念はいらない、まず命を救え！』98-99頁。

59) 中村、前掲『ほんとうのアフガニスタン』164頁。

60) 中村、前掲『医者よ、信念はいらない、まず命を救え！』43頁。

61) 同上書、102頁。

62) 丸山、前掲『ドクター・サーブ』94頁。

#### Ⅳ. グローバル化時代のアジア主義

本論では、以上のような中村の思想を下記のような理由で、グローバル化時代のアジア主義と規定する。

まずアジア主義の定義であるが、一般には、アジア主義とは、近代世界において西欧の政治的・軍事的・文化的侵略に対して、アジアの人々は力を合わせ、これに対抗していくべきという感情・理念・態度・思想・行動を指している。しかし、この定義を中村の場合に適用して、彼の行動と思想をアジア主義というには、若干の留保が必要である。

まず、前半の「近代世界において西欧の政治的・軍事的・文化的侵略に対して」では、近代を「近現代」と読み替えれば、問題はない。しかし、後半の「アジアの人々は力を合わせ、これに対抗していくべきという感情・理念・態度・思想・行動」のうち「力を合わせ、これに対抗していく」の点では、問題が起こる。この点は、戦前の典型的な大アジア主義と対照してみると、明確となる。

アジア主義には、一国的 (national) 側面、国家間的 (international) 側面、トランズナショナル的 (transnational) 側面があり、現実のアジア主義の思想と行動には、この三つの側面が混在している。第二次大戦前の日本のアジア主義では、対外膨張の国家主義、欧米勢力のアジア浸透に対する警戒・反発、およびその他のアジアの人々と価値に対する共感 (思い込み) が、絡み合っていた。その中核となっているのが、日本国家の膨張主義である。戸坂潤 (戦前のマルクス主義哲学者) によれば「日本主義は東洋主義又は亜細亜主義にまで発展する。尤も之はただのアジア主義ではなくて、日本主義の発展としてのアジア主義、云わば日本アジア主義なのである。」「日本は云う迄もなくアジア全体ではないのだから、ではどういう風にして日本精神主義を日本アジア主義にまで拡大するのであるか。…日本自身を東洋にまで、アジアにまで、拡大すればいい。日本は東洋・アジアの盟主となり、そうすることによって或る種の世界征服に着手する、それがわが大アジア主義という戦略であり哲学なのである<sup>63)</sup>。」この説明は、孫文の中国革命運動を支援した玄洋社頭山満・黒龍会内田良平など大アジア主義者の場合には、うまく適合する<sup>64)</sup>。それは、大東亜共栄圏の思想の場合にも適合する。

これに対して、中村の場合には、日本が国家としてアジア世界を指導していくとの発想自体が否定されている。彼は、国家ではなく、市民の手によって、アジアの人々が「力を合わせ」、欧米に「対抗」していくことを選択する。彼の思想をアジア主義というとしても、そこには、日本国家によるアジア主義の実現 (実は大アジア主義化) というイデオロギー性はない。しかし、山室信一 (現代の日本政治思想史研究者) によると、「アジア主義の主張が共感を得る心

63) 『戸坂潤全集』第2巻、勁草書房、1966年、295-297頁。

64) Marius B. Jansen, *The Japanese and Sun Yat-sen*, Massachusetts: Harvard University Press, 1954. 初瀬龍平『伝統的右翼内田良平の研究』九州大学出版会、1980年、参照。

理的基盤として、アジアと『国際社会』とに二重に属することを強いられ、しかもその『国際社会』と称されるものが実は欧米的な基準によって構成された擬似普遍でありながら、アジアを特殊なものとして『国際社会』の基準に強制馴化させるものであることへの反発があったと言えるであろう<sup>65)</sup>。」

この一般的定式を中村のアジア主義に適用すると、山室が「擬似普遍」とするものは、中村によれば、米欧がアジアの人々に押し付けてくる「国際秩序」、「人道的援助」、「自由」、「民主主義」のこととなる。このように理解すると、中村の思想はアジア主義的といって、差し支えないことになる。

さらには、竹内好（戦後の代表的アジア主義の研究者）によると、「アジア主義は、ある実質内容をそなえた、客観的に限定できる思想ではなくて、一つの傾向性ともいべきものである。右翼なら右翼、左翼なら左翼のなかに、アジア主義的なものと非アジア主義的なものを類別できる、というだけである。…アジア主義は、膨張主義または侵略主義と完全には重ならない、ということだ。またナショナリズム（民族主義、国家主義、国民主義および国粹主義）とも完全には重ならない。無論、左翼インターナショナリズムとも重ならない。しかし、それらのどれとも重なり合う部分はあるし、とくに膨張主義とは大きく重なる<sup>66)</sup>。」この規定によると、中村はアジア主義的傾向性をもつことになる。それは「左翼インターナショナリズム」ではないが、国家と国家、あるいは国民と国民との国際主義ではなく、民と民とのトランズナショナリズムと重なっている。大アジア主義と重ねて考えると、トランズナショナリズムと重なるアジア主義は、形容矛盾のように思える。しかし、アジア主義を「傾向性」ととらえると、トランズナショナルなアジア主義があってもおかしくない。

アジア主義といえそうな思想が、多様な形態をとるのは、実は、個々のアジア主義がその時代背景と相関しているからである。すなわち、特定のアジア主義で、その重点がアジア主義の成分のうちの一国的か、国家間のか、あるいはトランズナショナルのどこにおかれるか、またその重点は政治的なのか、文化・社会的なのか、それとも経済的なのか。このようなことは、それぞれの時代背景となる国際関係のシステムの特徴によって、規定される。たとえば、戦前日本のアジア主義の重点は、日本の植民地以外の欧米植民地で、アジアの諸民族の独立を支援することであった。しかし、アジア諸民族の独立の目標は、1940年代後半から50年代にかけて、達成された（インド、ビルマ、セイロン、マレー、インドネシア、フィリピン、朝鮮・韓国、中国）。独立後アジア諸国の最初の国家目標は、経済の自立の達成となった。今度は、アジア主義の重点は、アジア諸民族の経済自立の国際的支援となるはずであった。しかし、戦後日本からは、このような経済的アジア主義の主張は出されなかった。その原因は、第一に、アジアではヨーロッパと違って、当時、経済統合の機運はきわめて微弱であったこと、第二に、冷

65) 山室信一「日本外交とアジア主義の交錯」前掲『年報政治学1988日本外交におけるアジア主義』13頁。

66) 竹内好「(解説)アジア主義の展望」同編『現代日本思想大系9・アジア主義』筑摩書房、1963年、12頁。

戦がアジアに分裂を持ち込んでおり、アジア全体を対象とする地域協力は、どのような形にせよ、そもそも考えられなかったことにある。

1970年代後半から進んできたのが、アジアの途上国での貧民救援、難民救援、社会開発などでの各種NGOの活動である。彼らは、近代日本の大アジア主義とはまったく無縁であり、政治の論理、経済の論理に振り回されることを拒絶する。しかし、彼らは、アジアの民衆に接近し、そこに人間としての共通性を見だそうとする。彼らは、アジア主義の第三の成分、すなわちトランズナショナルな側面に傾いていく<sup>67)</sup>。このタイプの一つの典型が中村哲の場合であると考えられる。

次に、グローバル化時代という国際的歴史状況のなかで、アジア主義的言説の存在形態を検証したい。

福元満治は、グローバル化時代の「骨董品」として、アフガニスタンとペシャワール会を規定する。すなわち「金融・情報とテクノロジーで世界を根こそぎに均質化するグローバリズムの嵐の中にあっても、その軽佻浮薄に頑固に馴染まないアフガンの風土と民衆が骨董品的に美しいのである。私たちペシャワール会も美しくないが骨董品的である<sup>68)</sup>。」これは、中村・ペシャワール会の活動を支える特定の心情・信念を、グローバル化時代の世界的均質化という特徴と対比して、提示したものである。

ここでグローバル化を定義しておくとして、グローバル化とは(1)資本主義を動因として、(2)近代化、西欧化が進み、世界が一つになること、(3)国際人権思想が普及し、世界中の人々が同じ人間として共感し合うこと、(4)世界中の人々が地球を共有し、地球的課題に取り組むこと、(5)情報通信革命と運輸技術の飛躍的進歩によって、地球が狭くなり、人々のトランズナショナルな活動が活発になること、(6)以上の変化に対応して、国際関係の再編がグローバル・ガバナンスに向けて進むことであり、(7)グローバル化の一面として地域主義を活性化すること、および(8)グローバル化への反発として国家主義を呼び起こすことである。

ここでもう一度、アジア主義には、一国的(national)側面、国家間的(international)側面、トランズナショナル的(transnational)側面が絡んでおり、戦前日本の大アジア主義では、三者の絡み合いの上に、一国的側面がその中核にあったことを確認しておくとして、現代のグローバル化時代では、むしろ3つの側面は分離傾向にあると思われる。そもそも、政治的にせよ、経済的にせよ、文化的にせよ、現在のアジア世界で何らかの意味での日本の覇権的リーダーシップの可能性はあり得ない。そこでアジア主義は、3つの成分のそれぞれに分解していくことになる。

第一に「一国的」成分であるが、上述の定義(8)のように、グローバル化時代にあって、グローバル化への反応として、国家主義が強化される。大アジア主義的発言はいまも続いている。

67) 初瀬龍平『国際政治学—理論の射程』同文館、1992年の第7章「アジア主義の転生—NGOの思想へ—」を参照。

68) 福元、前掲書『伏流の思考』8頁。

たとえば、西尾幹二（「新しい歴史教科書」執筆者）は「日本は向こうみずで少し思い上がった愛国戦争を戦っただけである。その結果、幕末以来の『西力東漸』の波に抗し、地球規模で東から西への力の逆流を引き起こす文明の転回点の役割を果たした。」と述べる。しかし、彼は「中・韓両国が日本にいわれのない優越感を持っている」と思っている<sup>69)</sup>。この発言の前半は、大アジア主義的であるが、後半は、アジア主義的でない。これは、国内向けには、一定の有効性をもつ政治的発言であるが、対外的にはアジア諸国・国民から強い反発を受けて、現実にも反アジア主義的となる。過去を称揚するのは、ナショナリズム、とくに国家主義の一般的特性である。このように、国家主義の成分を切り出した現代の大アジア主義的言説は、一見アジア主義と見えるが、もはやそのようなアジア主義の時代は終わっている。それは、国家主義に純粹化していくであろう。

第二に「国家間的」成分であるが、上述の定義(7)のように、グローバル化時代にあって、グローバル化の一面として、地域統合が進められる。近年、東アジア共同体論が急速に台頭してきている。ところで、経済的地域統合論は、これが初めてではない。1960年代以来、小島清（国際経済学）、大来佐武郎（政策学者、元外相）などから太平洋経済圏や太平洋地域・アジア太平洋の地域協力構想が出されてきた<sup>70)</sup>。しかし、自由貿易を主張する兩人とも、アジア主義的心情には立っていない。構想の対象となっている地域も、むしろ太平洋州のオーストラリアとの関係から始まったもので、いまはアジアを組み込んで、アジア太平洋地域となっている。この背景には、戦後日本の対外政治・経済が、対米依存的事業であってことが関係している、と思われる<sup>71)</sup>。日本に限って言えば、日米関係のベクトルとアジア地域論のベクトルを合成したのが、東アジア共同体論といえよう。

この他に、原洋之介（アジア経済論）が、小島、大来と違って、新古典派の開発経済学に懐疑的であるが、アジアの人々の生活を守ろうとして、東アジア（アセアン諸国を含む）で「多層的多角的協力スキーム」の構築を提言している<sup>72)</sup>。この原の提言は、アジア主義的に読める。しかし彼は、アジア主義についても脱亜論についても、アジア諸地域の現実の特性を見ておらず、アジアとヨーロッパの「二項対立的枠組み」の議論にすぎない、と否定的に評価する<sup>73)</sup>。1990年代になると、アジアにおける地域主義が経済的意味で主張され、広く受け入れられるようになっていく。日中韓およびアセアン諸国で経済圏、共同体を形成する時期が到来している

69) 西尾幹二『歴史を裁く愚かさ』PHP研究所、1997年、216、227頁。

70) 小島清『世界経済新秩序と日本』日本経済新聞社、1975年。小島清編著『太平洋経済圏の生成』第三集、文眞堂、2001年。大来佐武郎『八方破れの経済戦略』東洋経済新報社、1978年。小野善邦『わが志は千里に在り—大来佐武郎評伝—』日本経済新聞社、2005年、379—437頁。

71) 戦後日本外交が初期から、対米協調と対アジア配慮との微妙なバランスを取ることに乗っていたことについては、井上寿一「戦後日本のアジア外交の形成」前掲『年報政治学1998日本外交におけるアジア主義』、佐藤晋「戦後日本の東南アジア政策（1955～1958年）」中村隆英・宮崎正康編『岸信介政権と高度成長』東洋経済新報社、2003年、参照。

72) 原洋之介『新東亜論』NTT出版、2002年、233頁。

73) 原洋之介『現代アジア経済論』岩波書店、2001年、vi頁、228頁。

というものである<sup>74)</sup>。今回の東アジア共同体論は、自由貿易圏の構想と連結しており、かなりの程度進行するかもしれない。これは、アジア地域主義であるが、心情的な共感に基づいていないという意味では、アジア主義的でない。このアジア主義なきアジア地域主義は、これから強力になっていくであろう。

第三に「トランズナショナル的」成分であるが、上述のように、1970年代後半から進んできたのが、アジアの途上国での各種NGOの活動である。NGO活動家は、近代日本の大アジア主義とはまったく無縁であるが、アジアの民衆に接近しようとする。もちろん、すべてのNGOがアジア主義的である訳ではない。しかし、彼らのなかに、アジアの人々に同じアジア人としての共通性を見出す者は少なくない。その例を挙げれば、1980年代にタイ国境でカンボジア難民を支援したカンボジア難民救援会（Kampuchean Refugees Relief Program）の代表小野了代は、難民キャンプで、素朴で美しいカンボジア人の笑顔を見て、「それぞれに悲しい運命を背負っていても、内に秘めて多くを語らないカンボジア民族。そんな中に、私は東洋人としての共通性を見た思いがした」と述べている<sup>75)</sup>。彼女の場合は、欧米支配への対抗軸よりも、人権擁護の普遍的軸が強いので、アジア主義者とはいえないが、その心情に、アジア主義的なものが潜んでいることも否定できないであろう。さらには、中村哲の行動を呼び起こした医師岩村昇がいる。彼は、1960～70年代にネパールの農村山岳地帯でJOCS派遣の医療活動に当たっていた。彼には、アジア主義的心情が明白である。彼の言葉によると、「アジアと共に生きることによって、自分が、そして日本が救われるのだ<sup>76)</sup>。」彼が現地で発見したのは、伝統社会内の西洋医学の限界であった。思想面では、中村は、ある意味で岩村の延長線上にあるといえよう。

中村の世界認識では、国際レベルで西欧化の進展、および米国のヘゲモニーに対する批判や疑念が明確である。これは、グローバル化の定義のうち、(1)資本主義、(2)近代化、西欧化を批判し、(3)国際人権思想、(6)グローバル・ガバナンスについて、それが現実に米欧の世界支配の一環であることに疑念を提出するものである。もちろん、中村がこの批判や疑念を実現するために、現地で活動しているのではない。事実関係は逆である。上述のように、彼が自己の歴史的存在を確認する認識の枠組みとして、アジア主義的な世界認識を用いているのである。これが「アジアで共に生きる」という現地活動に具現されている、とみるべきである。

このように、グローバル化の時代にあって、第一に大アジア主義の残影は、一国的な国家主義の議論となっている。第二に、東アジア共同体論などの経済的地域統合論は、国際的な「機能的なアジア」論であり、心情的なアジア主義とは無縁であるが、これからいっそう強力となろう。第三に、トランズナショナルなアジア主義は、国際的に米国中心のグローバル化に反発

74) 谷口誠『東アジア共同体』岩波書店、2004年。「特集1：東アジア共同体の可能性」『アジア研究』第51巻第2号、2005年4月、参照。

75) 小野了代「カンボジア難民救援とアジアの将来」『果てしなき飢えの中で』第1号、1980年10月、6頁。

76) 岩村、前掲『共に生きるために』237頁。

しながら、「アイデンティティとしてのアジア」論に立って、行動レベルでトランズナショナルリズムを実践している<sup>77)</sup>。このタイプのアジア主義も、古典的なアジア主義の定義の一部しか充足していない。しかし、このタイプは「アジアで共に生きる」という心情と信念に支えられている点で、他の二つよりもアジア主義的である、といえよう。

## V. 結びに代えて

本論では、以上のように、中村哲の思想と行動から、そのアジア主義的性格を抽出しようとしてきた。

本論では、第一に彼の活動と、その活動を支えたベシヤワール会の活動を、現地活動を中心にして概観した。この現地活動は、医療活動から農村再生支援活動へと発展するとともに、その医療活動はパキスタンからアフガニスタンに拡大され、アフガニスタンでは農村再生支援活動が始められている。この20数年は、アフガニスタンはソ連の侵略とムジャヒディーンゲリラ戦、ソ連撤退後の内戦、その後のタリバーン政権の成立、それからアフガニスタン空爆とタリバーン政権の崩壊と、激動の時期であった。その困難な時期のなかで、現地の必要を具体的に汲み取った医療や水資源確保、さらに灌漑用水路の建設という形で、現場での日常活動が地道に展開されてきている。

第二に、本論は、これらの活動を支える中村の心情と信念を明らかにし、さらに活動の意義付けの枠組みとなる彼の世界認識を検証した。彼の世界認識の中心には、国内と国際関係における西欧的近代化への反対がある。彼は、米国のアフガニスタン空爆と復興支援の分析を通じて、欧米世界支配がアジアで具体的にどのような問題をもたらすかを提示している。彼の世界認識には、アジア主義的性格がかなり強力である。心情・信念と世界認識をつなぐのは「アジアで共に生きる」という信条である。

第三に、本論では、彼のアジア主義をグローバル化時代のアジア主義と理解し、それをアジア主義の一般的特性との関連で考察したうえで、グローバル化時代における国家主義的言説と東アジア経済統合論と対比して、中村のアジア主義をトランズナショナルなアジア主義と規定した。しかし、それが従来のアジア主義の理解では、完全なアジア主義とはいえないことも確認した。

これまでの本論の議論では十分に論じなかったことであるが、中村は現地での活動を通じて、日本国の平和憲法・第9条の支持の立場を強めている。彼はつぎのように語っている。

77) 東アジア共同体論の議論に関連して、毛里和子（中国政治）は「アジア・コミュニティについての知的接近」について、次の6の指示対象（referent）、すなわち（1）「虚構としてのアジア」、（2）「シンボルとしてのアジア」、（3）「働く場としてのアジア」、（4）「アイデンティティとしてのアジア」、（5）「機能的なアジア」、（6）「制度としてのアジア」を指摘する（毛里和子『東アジア・コミュニティ』にどうアプローチするか？』『アジア研究』第51巻第2号、2005年4月、1-2頁）。本論では、このうちの（4）と（5）について言及している。



実は、20年前にはじめて現地アフガニスタンに行くまでは、憲法に対して、ばくぜん「守らねばならぬもの」と感じていただけでした。ですが、現地では、その後ずっと、吾が身のほうが「憲法9条」に実際に守られてきたことを肌身に感じています。中東においては、…実際に、戦争をしない国・日本の人間である、日本人である、ということに守られて仕事ができ、ということが数限りなくあったのです。…現実として「平和の国・日本」というイメージが浸透していたのは、…国の方針としての9条の精神、「交戦しない国・日本」が伝わっていたからだと思います。日本人であるから命拾いをした、助けてもらったというのも、9条のおかげだと思っています<sup>78)</sup>。

さらに彼は、予想される反論に反論して、つぎのように語る。

改憲したい、と言う人々は、戦争の実態を、身をもって経験していない人なのではないか、と思います。よく理想だけではやっていけない、ちゃんと現実を見なければ、と言いますが、それこそが“平和ボケ”の最たるものです。それは、マンガと空想の世界でしか人の生死の実感を持ってない、想像力や理想を欠いた人の言うことです。現実を言うなら、武器を持ってしまったら、必ず、人を傷つけ殺すことになるのです。…攻められたときの防御が必要だ、という意見もあります。そのときに戦えなければいけないから武力を持つべきだ、と。しかし、これまでのどんな戦争も「守る」ために始まった。「自国を守るため」という名目で外に行って、非道なことをしているんです。悪いことを始めるときに本当のことを言って始めるわけじゃないんです。大義名分を押し立てて始める。それが現実なんです<sup>79)</sup>。

グローバル化時代のトランズナショナルなアジア主義であれば、すべて平和憲法論となるとはいえないであろうが、中村の場合、そのアジア主義の実践が平和憲法を擁護する議論の基盤となっていることに注目したい。

最後に、本論文の問題点であるが、資料が中村やペシャワール会の刊行物に一方的に傾いているのが、基本的問題点である。私としては、これらの資料を読むとき、その他の一般的資料を参照して、全体的に考察しているつもりであるが、どうしても彼らの主張に引きずられている、と思われる。本論で描かれたことは、正確に言えば、中村・ペシャワール会の側からみた中村・ペシャワール会の活動と言説という主観の世界のことである。これに対して、本論は、彼らの主観的世界を出来るだけ彼らの主張に沿って提示することで、限定範囲内での客観性を保証しようとした。これは、主観性の世界でできるだけ客観性を保つための一つの方法である、と思っている。

78) 『「憲法を変えて戦争に行こう」という世の中にしないための18人の発言』岩波ブックレット、2005年、8-9頁。

79) 同上書、9、11頁。

本論は、平成16年度京都女子大学研究経費助成「グローバル時代のアジア主義」の研究成果の一部である。